



五代における前蜀および後蜀の文化について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 整治 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00000967

五代における前蜀および後蜀の文化について

田 中 整 治

北海道学芸大学旭川分校史学研究室

Seiji TANAKA : On the Culture of Ch'ien-Shu and
Hou-Shu in the Five Dynasties Period (Wutai)

目 次

I 序	V 王建と唐室との関係および前蜀の文化
II 蜀地方に文化の発達した理由	VI 後蜀の文化
III 玄宗の蜀都蒙塵とその影響	VII 結
IV 僖宗の蜀都蒙塵とその影響	

I 序

五代の初、唐の西川節度使の任にあつた王建が、成都を根拠地として建てた前蜀（907～925）においては、唐朝の文化特に開元・天宝以前の中世史期的な文化が温存され、余光を保つたことについては、既に先学の指摘するところであるが、¹⁾ 本小篇においては、前後蜀の首都成都を中心とする地方に、唐文化の色彩の豊かな文化が保存された理由ならびにその文化の内容について少しく触れて見たいと思う。

II 蜀地方に文化の発達した理由

前蜀に文化の発達した理由としては、既に内藤虎次郎博士の指摘するところであるが、²⁾ 大別して二つの理由が挙げられると思う。それは前蜀に固有なるものではなくして、古来四川省の蜀地方を中心とする地方に文化の発達した理由と同様のものである。今から、古くより唐の頃まで蜀地方に文化の発達した理由について考える。即ち第一の理由としては、外部よりの影響によるものである。それは紀元前 316 年に、この地に拠つていた独立の王国が秦王国に滅されてその領土となり、³⁾ 秦の意欲的積極的な開発が進められて、移民が送られ、農業・蚕業・工業等が更に発達したためである。即ち紀元前 4 世紀末に、関中との交通が開かれ、その結果中国の文化がこの地方に流入したためである。とはいつても秦の文化は戦国七雄諸国中最も立ち遅れていたため、中原の文化を蜀の地方に伝播する機運を生せず、漢初の蕭何の場合も同様であつた。⁴⁾ 然るに漢の文帝の時代（180～157 B.C.）に中国の中央の文化が、徐々にも微温的に蜀地方に伝播する第一段階が開かれたようで、文帝の末年に廬江の文翁が蜀の太守の任にあつたとき、蜀地方の俊英を長安に留学させて、蜀に還つて後、子弟の教育に当らせてから、⁵⁾ これが中央の学問をこの地方に伝播し、成都地方の文運の開発に貢献すること多大であつたことは疑う余地がない。まして天産の豊富な蜀地方に、衣食が充ち足りて、生活に余裕のある豪族が多かつたことにおいておやであり、

彼らの或る者は成都出身の辞賦を以て知られる、司馬相如の後援をなしたりして、蜀地方の文化が、漢の長安の文化を受けて長足の進歩を遂げた。次に第二段階と考えられるのは、公孫述の成都を首都とする大成国創立で、これは紀元25年4月のことであり、竜興の年号を用い、李能・任滿らを挙用して百官を置き、宮殿楼閣を造営して、帝都の美をなすことに努め、国富み民殷^下かんで一時的に覇を唱え、12年間の存続にすぎなかつたが、この間帝都を運営するために長安、洛陽の文化を移入したと思われる。次に第三の段階として、劉備が帝号を称し、章武の元号を立てた紀元221年4月が挙げられるが、昭烈帝の左右には許靖・諸葛亮らの輔弼の名臣多く、百官官省整頓され、264年に滅亡するまでの44年間の蜀二代の皇帝の在位中、成都是帝都であり、その開化の見べきものがあつたことは、略々想像できる。次に第四の段階は李雄の成漢国成立で、この国は306年6月に成都に成立して347年3月まで、43年間存続したが、この間成都是政教の中心地をなした。この第一段階から第四段階までは、全体的に見ると、中国中原の文化が徐々に微温的に成都地方に伝播し、成都地方の人々は、中国文化の影響を受けて、これをより多く学ぼうとする時代である。然るに唐の開元時代以後になると、その傾向が變つてくる。次に第二の理由としては、この地方に天産物が豊富であつたことが挙げられる。この地方が秦の領土となつて後、開発が進められ、天産物が豊富に産出され、経済的に恵まれていたため、都市が発達し、そこに文化人が多く出て、地方的文化の発達を促進したのである。要するに古来蜀の地方には独自の文化が発達していたらしいが、⁶⁾この地方の経済力を背景にして、関中からの中国文化の影響を受け、地方的に相当程度の高い文化が開発されて唐の玄宗時代に至るのである。

Ⅲ 玄宗の蜀都蒙塵とその影響

以上において、古くから唐代に至るまで、蜀の地方に文化の相当発達した事情を略述したが、これから8世紀の中頃の唐の玄宗時代に、中原の文化が四川に導入された事情ならびに9世紀の後半の僖宗の時代に、その程度は玄宗の時代に比すべくもないが、中原の唐文化が、四川の成都を中心とする地方に移植されるに至つた事情を旧唐書・通鑑等を中心として述べて見たい。

先ず玄宗時代に中原の文化が、蜀の地方に導入されるようになったのは、安祿山の乱により、首都の長安の防備が危うくなつたため、蜀の成都に天子が蒙塵する事件が発生した故であるので、この蜀都蒙塵について考えて見よう。これについては、旧唐書卷九玄宗本紀(天宝15載の条)、新唐書卷五玄宗本紀(天宝15載の条)、資治通鑑卷二一八肅宗紀などに見えているが、何れも記述が詳細にわたらず、一面的な把握しかできないので、比較的詳述してあると考えられる旧唐書卷一〇八韋見素伝によつて述べて見たい。彼の伝によると、「賊軍の勢力が盛んで、唐政府軍の旗色が悪くなり、天宝15載(756)6月玄宗皇帝が倉皇として出幸し、行先が不明であつたので、楊国忠が身を以て劍南旄鉞を領し、玄宗の成都への行幸を請うて後、韋見素は楊国忠・御史大夫魏方進らとともに玄宗と延秋門に遇い、そのまゝ帝に扈從し咸陽に至り、翌日馬嵬^{ウイ}駅に宿泊した。警護の兵士らは食糧がえられず、流言が盛んに飛んだ。竜武將軍の陳玄礼は、兵士らが叛乱を起そうとするのを恐れて、飛竜馬家の李護国と共に皇太子に謀つて楊国忠を誅し、兵士らの気持を慰さめようとしたが、この日玄礼らの禁軍は、行宮を包圍して尽く楊氏一族を誅殺した。韋見素は遁走して、乱兵のために負傷したが、幸にも救助された。しかし朝臣の魏方進は乱兵に殺害された。この日朝臣の中で玄宗に従う者は韋見素唯一人であつた。この夜も馬嵬駅に宿泊したが、玄宗は見素の子で京兆府司録參軍の韋諤を御史中丞に任命して、置頓使に充てることにした。そして翌早朝、六軍の將士を進發させようとしたとき、將士らは『国忠の背叛で、更に蜀川に行け

ないので、河隴地方に行くよう願う。』と避難先の希望を述べたが、また靈武、太原に避難しようとする意見もあり、長安に帰還せんとする意見も飛出して、容易に決定しなかつたが、玄宗の真の意向は劍南に避難することにあり、これは将士の意見と甚だ相違していることを考慮にいれて、特に行先についての意思表示はなかつた。韋諤の意見はどうかといえば、玄宗一行が帰京するには、賊に対する防備が必要になるが、今兵員・馬匹共に少数で、万全の備がないために、扶風に赴くのが目下最善の方法であるという意見であつて、玄宗が韋諤の意見を将士に詢つたところ承認をえた。かくて玄宗が扶風郡に到着すると、従駕の諸軍では、各去就を決しようとして頗る醜言もでたようであつた。陳玄礼が諸軍を制することのできないのを知つた玄宗は頗る憂慮したが、偶々益州より春綵10万疋を貢納したので、それを目の前に置いて、『朕は今から蜀の成都に行幸しようと思う。ところが蜀に通ずる途中の道路は險狭であり、迎り着くまで難渋しなければならぬが、幸に到着しえたとしても、蜀の成都は人口稠密であるので、祇供し難いであろう。今ここに春綵がある。卿らは各々これを分配して各自の分前を取り、去就を図つてくれ。朕には子弟と中官らの側近がいるので、ここで卿らと訣別しよう。』と悲壯な決意を以て述べたところ、なみいる将士らは皆俯伏号泣して、陛下と死生を共にする決意であると誓つた。かくて7月巴西郡に至り、韋見素に左相武部尚書を兼任させ、数日の後、蜀郡に到着した。見素は金紫光禄大夫を加えられ、關国公に進封され、その一子には五品官が与えられた。』と見えている。

以上が旧唐書韋見素伝による安祿山の乱を避けての玄宗の蜀都蒙塵の概要である。玄宗の蜀都蒙塵によつて、さしも絢爛豪華を誇つた盛唐文化も衰え始めたが、たとえ玄宗に扈從して入蜀した人員が官吏・兵士を含めて1300人、宮女は24人にすぎず、また短日月の滞在にすぎないとしても、盛唐文化の権化である玄宗と貴族たちの入蜀は大に注意すべき事件であり、成都の人々が盛唐文化の担い手である玄宗とその扈從者とを迎えて、積極的に盛唐文化の消化吸収に努めた様が察せられる。前掲の韋見素伝には、この際に文人・画家であつて玄宗に従つて或は少し後れて、この地に移り住んだ者については触れていないが、旧唐書の列伝、元の夏文彦の図繪宝鑑卷二などを見ると、該当する文人・画家の名を知ることができる。図繪宝鑑卷二によると、画家の盧楞伽は、吳道玄にその画風を学び最も経変相を画くに巧みで、蜀地方に移住してその名が益々著われ、乾元の初(元年は758年)に、大慈寺において、行道僧を画いたと見えており、彼の入蜀の時期がはつきりしないが、恐らく756年から翌年にかけて移住したのであろう、文人については残念ながら史料がないようであるが、旧唐書卷一九〇下文苑伝下に「李華、字は遐叔。趙郡の人なり。開元二十三年進士擢第。(中略)祿山、京師を陥るるや、玄宗出幸す。華、扈從するも及ばず、賊に陥り、偽署せられて鳳閣舍人となる。」とあるのや、「王維字は摩詰、太原の祁人なり。(中略)天宝の末、給事中となる。祿山、兩都を陥るるや、玄宗出幸す。維、扈從するも及ばず、賊のうるところとなる。」とあるのなどによつて、これらの文人は、不幸にも安祿山側に捕えられて、玄宗の蜀都蒙塵の際に、扈從しえなかつたのであるが、恐らく玄宗に扈從して、成都に一時的に避難した文人も少人員はあつたであろう。玄宗の成都に入つた翌年7月、皇太子が靈武で即位して至徳と改元したが、これが肅宗である。玄宗は上皇となつたが、叛乱はいわゆる安史の乱と拡大して長きにわたり、至徳2載12月(757)玄宗は1年6ヵ月ぶりで、長安の興慶宮に帰ることができた。玄宗の帰京後、成都の地方は關中の地方から人口の著しい流入はなかつたが、引続いて兵乱を避け、四川の成都に移り住む者がその後もあつたと思われる。図繪宝鑑卷二によると、敬宗の宝曆中(825~827)長安の人趙公祐は蜀に寓居したが、仏道鬼神を巧みに画いたとあり、また懿宗の咸通中(860~873)長安の人常榮は路巖侍中が成都尹・劍南西川節度使の任に

あつた時代に、蜀に入り厚遇せられて、人物画をよくしたというのがその一二の例である。

IV 僖宗の蜀都蒙塵とその影響

玄宗の入蜀してより約120年の後、僖宗の成都への蒙塵が起つた。これは僖宗の乾符2年(875)黄巢の乱が、山東省北部地方に起り、乱の影響がたちまち四方に拡大され、乱の主魁の黄巢が広明元年(880)東都洛陽を陥れ、潼関の險要を突破して遂に長安に侵入したためである。広明元年(880)12月3日黄巢の軍が潼関に侵入するや、その夜僖宗は難を避けて興元に出幸したが、戸部侍郎同中書門下平章事王徽・崔沆・豆盧瑑・僕射于琮らは翌朝それを知り、帝の迹を追つたが及ばなかつたところを見ると、出幸が突然のことであり、而も帝に扈從する者の少なかつたことが察せられる。僖宗の成都への蒙塵については新唐書卷九・旧唐書卷一九下および資治通鑑卷二五四などに記載されているが、今通鑑によると、広明2年(881)春正月車駕が興元を發して、牛勗に同平章事を加えたが、陳敬瑄が僖宗に扈從する人々は驕縱で、制し難いと考えていた折しも、内園の小兒が僖宗より先に成都に到着し行宮で遊び、笑つて『人々は元來西川地方は未開野蛮の地域であると言つていたが、今日当地にやつて来て、様子を見てみると、評判ほど經濟文化の程度も悪くない』と言つたので、敬瑄のために杖殺されたとある。これによつて見ても125年前に玄宗が安祿山の乱を避けてこの地方に滞在して以来、この地方の文化が、玄宗および唐朝の官吏などによつて開發高揚せられてきたさまが察せられる。旧唐書の僖宗紀によると、「車駕が広明2年(881)の6月成都府に達すると、西川節度使の陳敬瑄が親ら来て奉迎し、7月乙卯車駕が西蜀に至り、丁巳(この日中和と改元)成都府廡に玄宗が出御した。」と見えている。また資治通鑑卷二五四僖宗の広明2年3月の条によると、「群臣の車駕に追從する者稍く成都に集まり、南北の司朝者二百人に近し。諸道および四夷の貢獻絶えず、蜀中の府庫充實し、京師と異なるなし。賞賜乏しからず、士卒欣悦す。」とあるので、僖宗の成都滞在はさながら臨時に帝都の遷つて来たようなもので、4年1カ月の長い滞在のために、自然晚唐朝の文化もある程度この地に傳播されたと思われる。僖宗は翌々年雁門節度使李克用が、黄巢の軍を破つて長安を回復したので、辛うじて長安に帰還することができたのであるが、これは僖宗が長安を脱してから、4年1カ月ぶりのことであつた。さて僖宗の成都への避難に際しては、それに扈從する官吏・文人等は玄宗の時に比べて少かつたと察せられるが、それでも相当数あつたものと思われる。今史料によつて若干の実例を拾つて見ると、

「[広明]2年正月成都、王鐸を以て叡に代え、兵を將いて収復せしむ。」(旧唐書卷一七八鄭畋伝)

「[広明]2年人を遣わして問道より、絹表を奉じて蜀に入らしむ。矢子之を嘉し、詔して光祿大夫を授け兵部尚書を守せしむ。將に行在に赴かんとす。」(同上卷一七八王徽伝)

「僖宗、蜀にあるや、邁コウまた鐸と並びて相位に居る。」(同上卷一七八蕭遘伝)

「孔緯、黄巢の乱、僖宗の蜀に幸するに従う。」(同上卷一七九孔緯伝)

「韋昭度、僖宗の蜀に幸するに従い、戸部侍郎を拜す。」(同上卷一七九韋昭度伝)

「僖宗蜀に入るや、紹業を召して行在に還る。」(新唐書卷一八六陳儒伝)

などがある。これらは官吏の例であるが、画家の例としては図繪宝鑑卷二に「呂岷・竹虔は尹繼昭の弟子にして、並びに長安の人なり、道釈人物を画きて工なり。僖宗朝翰林待詔。広明中、扈從して蜀に入る。」とあるように呂岷・竹虔などが挙げられる。なお図繪宝鑑卷二によると、僖宗の時に、遜位という画の大家が蜀に入つたという。即ち「遜位は東越の人なり。僖宗蜀に幸する

や、位、京より蜀に入り。会稽山人と自称す。举止疎野。襟韻曠達。飲酒を喜ぶも、その酔を見ることまれなり。幽人と物外の交りをなすを楽しむ。光啓中。応天寺の壁に画くに勢飛動するごとし。後遇と改名す。卒に所在を知らず。世、竜水は尤も位の長ずる所と称す。」とあるのがそれである。蜀の成都是中原から隔たつた僻遠の地であり、戦乱をのがれて避難するには安全な土地であつたので、文人・画家らが皆蜀に入つた。成都で画が盛んになつたのは、中原から画家を受け入れたためであるが、一つにはある時代に画家が中原の画を持ち込んだり、或は画の模本粉本を持ち込んだため、これらは中原の兵乱のために、唐の秘府にあつたものの散逸したものをこの地に持ち込んだのである。図絵宝鑑卷二に「趙徳元は長安の人なり。天復中蜀に入る。車馬・人物・山水・仏像・屋木を画いて工みなり。」とある趙徳元のような画家は昭宗の天復中(901~904)かなり数多い画を持ち込んだといわれている。このようにして成都に蜀画が自然に発達したが、蜀の画家は代々相続して画をよく描いたものが多かつた。それは中原より風俗が淳朴なために世業としたのであろう。それらのうちで、唐末から後蜀まで続いた趙公祐の家は有名である。⁷⁾また清の彭遵泗の「蜀故」巻十六に見えるように、⁸⁾元和中成都の妓女薛涛の文才は元微之・白居易・牛僧孺・杜牧らに蜀地方の文苑たるを思わしめ、薛涛の出現とその詩牋とは、唐末の成都がいかに文運盛にいかに開化せられたかを察すべき一証で、殊に良紙の製産地として、唐一代を通じて有名な成都の蜀紙も文運の発達に大なる貢献をなした。

このようにして中唐晩唐時代の成都地方は、中国文化圏外にある未開の地域でなく、文化・工芸・美術などの上に唐代の風を継承すると共に、そのうちのあるものについては、その地方特有の色彩を発揮しており、工芸品でも蜀錦・蜀紙の名は中国史上に著明である。即ちこの時代の成都では、中原の中国文化を微温的に模倣することなく、これを消化吸収して、地方的特色を発揮するに至るのである。

V 王建と唐室との関係および前蜀の文化

唐朝が滅亡して世は五代となり、唐の西川節度使であつた王建が帝位に即き、成都を国都として前蜀国を建設すると、彼は唐文化の保護者・保存者として唐文化を温存した。前蜀の文化について述べる前に、唐文化の保存者保護者であつた王建と唐朝との関係に言及しよう。⁹⁾

王建は少年時代屠牛・盗驢・塩の密売をしていたというから、決して教養があつたとはいえないが、唐末忠武軍に隸属して、一兵士として身を起し、節度使杜審権に抜擢されて列校となり、王仙芝を討つて功績があり、後秦宗権が淮西によるや応募して軍虞候に補せられた。僖宗の広明年間(880~881)に黄巢の軍が長安を陥れたとき、帝は蜀に蒙塵したが、黄巢の部将朱全忠が襄・鄧の諸州を攻略したため、秦宗権の軍が監軍楊復光に従つて之を攻撃した際、王建も之に加わつた。この年復光は長安に入つて官軍を援け、翌年賊軍を破り長安を回復した。楊復光の死後、王建と旧知の別将韓建が忠武軍の殘党3000人を率いて蜀の僖宗の行在に赴き、随駕五都の5部隊を編成した。これは蜀都の僖宗の護衛に任ずる部隊であり、王建・韓建・晋暉・李師泰・張造が隊長に任じていたが、全体の指揮は十軍觀軍容使の田令孜に掌握されていた。そして田令孜はこれらの隊長を仮子として取扱つた。丁度この頃、黄巢の乱が平定を見たので、僖宗は成都より長安に帰還したが、僖宗は直ちに王建ら随駕五都の各隊長に命じ神策軍を率いて宿衛に任ぜしめた。光啓元年(885)河中の王重栄が田令孜と塩池を争うと、重栄が晋兵を召し長安を侵したので、僖宗は再び鳳翔に行幸し、翌年3月興元に移り、王建を清道斬斫使として玉鬘を負うて従行させた。皇帝の一行が当塗駅に至ると、邢寧の李昌符・朱玫らが棧道を焚いたので、王建は僖宗を助けて

煙焰の中を過ぎ、坂下に宿泊し、僖宗は王建の膝を枕として眠り、覚めて後彼に御衣を与えた。僖宗が興元に到着後、田令孜は僖宗の蒙塵はその原因が自分にあり、罪されんことを恐れて西川監軍に転じたいと願つたので、楊復恭が代つて観軍容使となつた。楊復恭は王建が平素令孜に厚遇されて、己に付かないのを恐れて王建を壁州刺史に任命した。僖宗が長安に帰還すると、楊復恭は楊守亮に命じて興元に鎮せしめ、王建の侵略を恐れて屢王建を召したが、目的を達しえなかつた。時に東川節度使顧彦朗は王建と交通し、軍資金・兵糧を融通したので、王建の侵略を受けなかつた。西川節度使の陳敬瑄が書簡を送つて王建を招いたところ、王建は彦朗に使を遣わし「招きに応じて成都に赴き、陳敬瑄によつて一大郡を得ることは願つてもないことである。」と喜びを伝え、その家族を東川に留め、成都に赴かんとしたが途中で阻止された。或人が陳敬瑄に「王建を招くことは虎を養うようなもので患を残すものである。」と忠告したからである。王建は漢州を根拠地とし、軽兵を率いて成都に迫ると、敬瑄がその境界侵犯を責めたのに対して、王建の軍使は「王建は敬瑄の招きに応じて成都に赴いたのに、いざとなると拒絶するのは何故か。」と詰問した。時に光啓3年(887)であつたが、王建は東川の兵を集めて成都を攻略して果さず、漢州に退き、約1月の後蜀地方を剽略し、その軍隊の勢力は日増しに盛んになつた。陳敬瑄は之を患えたが、協力者の彦朗も王建に侵略されはしないかと恐れるに至つた。昭宗が即位すると、顧彦朗が王建を除いて大臣を拵び、それを蜀帥に任命し、陳敬瑄を他鎮に移さんことを請うたので、宰臣の韋昭度に詔して蜀に鎮せしめ敬瑄の後任とした。しかし陳敬瑄が之を承認しなかつたので、昭宗は大に怒り、顧彦朗らに命じて之を討たせた。その時韋昭度は王建を牙内都校に任命し、その部兵を指揮させて、官軍が戦功を立てえないので、王建は韋昭度に解決策を昭宗と図れと迫つたが、昭度は王建の言に疑念を抱き決心がつかなかつた。しかし或日王建が行府門外で韋昭度の親吏をこまぎれにして軍士たちに食わせたので、昭度は恐れをなして符節を留めて王建に与え、即日東に帰つた。1カ月の後王建は西川節度使管内の8州を攻略し、遂に成都を攻めた。田令孜と王建との間に再び友好関係が生じ、その夜令孜は蜀帥の符印を携えて王建の軍営に入り彼に授与した。翌日敬瑄は蜀帥の職を建に譲つたので、王建は自ら西川留後と称した。大順2年(891)10月唐朝では少師薛廷珪を派遣して王建に檢校司徒・成都尹・劍南西川節度副大使知節度事管内觀察処置雲南八国招撫等使を授けさせた。かくて王建は西川をその掌中に収めて、政治に意を留めることになつた。12月唐朝は顧彦暉を東川節度使とし、中使宋道弼を遣わして、彦暉に旌節を与えしめたが、楊守亮が綿州刺史楊守厚に令して道弼を囚えて梓州を攻めさせたので、彦暉は救援を王建に求めた。王建は華洪・王宗侃・王宗弼らを遣わして、楊守厚を討たせたが、彦暉の兄の彦朗の死後、東川の併合をはかりまだ行動を開始していなかつた。王宗侃が守厚の七砦を破り、守厚を綿州に敗走させたので、守厚は旌節を道弼に返還した。彦暉は既に節具をえたが、たまたま宗弼が王建の謀を彦暉にもらしたので、彦暉は警戒し王建の計画は実行に移されなかつた。景福元年(893)正月王建と不和となつた東川留後の顧彦暉は、李茂貞が之を撫するのに尽力して、唐朝から東川節度使に任ぜられた。2月唐朝は王建に同平章事を加えた。乾寧2年(895)になつて王建は東川に事を構えたが、これは顧彦暉が兵を發して難に赴かず、輜重を掠奪したためで、華洪は東川の兵を楸林に破り梓州を包圍した。越えて3年(896)5月昭宗は宦官の袁易簡に命じて梓州に赴かせ兩川の和解をさせた。王建は詔を奉じて成都に帰還したが、連兵は依然解決しなかつた。時に荆南節度使の成汭がその將の許存と共に揚子江を遡つて江岸の州県を占領したので、武泰節度使の王建肇は黔中せんを棄てて豊都に退いた。そこで許存は兵を引いて渝・涪2州を抜いたが、汭はその將趙武を黔州留後とし、存は万州刺史武敦のために豊都を攻めたので、王建肇

は守ることができず、存と共に王建に降つた。8月唐朝は王建を鳳翔西面行營招討使とした。4年2月に至つて、王建は邛州刺史華洪らに東川を攻めさせ、戎州刺史王宗謹を鳳翔西面行營先鋒使とし、鳳翔の將を元武に敗つた。ついで王建は応援関峽都指揮使の王宗侃に兵8000人を率いて渝州に赴かしめ、開江防送進奉使の王宗阮に兵7000人を率いて瀘州に赴かしめたが、宗侃は渝州を取り、その刺史を降し、宗阮は瀘州を抜き、刺史を斬つたので、ここに初めて峽路が開通した。4月になり唐では、右諫議大夫李洵・判官韋莊を兩川宣諭使となし、彦暉と王建との間を和解させ、王建に詔して兵を罷めしめんとした。5月王建は節度副使張琳に成都を守らせ、自ら兵5万を率いて東川を攻めた。6月に入り李茂貞が王建の隣邦を侵略すること連年に及ぶと帝に上表したので、唐では王建を南州刺史に降任し、李茂貞を西川節度使とした。王建は梓州に勝ち、まもなく宣諭使李洵らが梓州に至り、王建と会見した。しかし王建は詔を奉せず、彦暉と50余回戦つた。9月には梓州を囲んだが、この月李茂貞が受代しなかつたので、唐はやむなく王建を再び西川節度使同平章事とした。10月になり知遂州・知合州らが皆王建に降つたので、王建の梓州攻撃は益々激しさを加えてきたが、遂に顧彦暉はわが身を仮子の瑤に殺させて梓州城は陥落した。王建は王宗紹に命じて兵を分ち、昌普等の州を狗めしめ、王宗濂（華洪）を東川留後に任命した。ここに至つて王建は初めて兩川の地を併有するようになった。12月には王建は梓州から成都に帰還した。乾寧5年（898）8月唐朝は改元して光化元年としたが、王宗濂が東川地方は疆域が広く、中央との連絡が不便であるため、遂・合・瀘・渝・昌の5州を分けて別に一鎮をつくらんことを請い、10月になり唐は王宗濂を東川節度使とした。2年（899）5月唐では武信軍を遂州に置き、遂・合等5州を之に属させ、6月には王宗佶を武信節度使とした。これは王建の要請によるものである。3年（900）2月唐は詔して王建の私門に戟を立てさせ、兼中書令を加えた、7月には唐朝は王建を西川節度使兼東川武信軍兩道都指揮制置等使に任命し、瑯琊王の爵位を与えた。王建は郡王の爵位を与えられたのである。越えて光化4年（901）3月唐は王を改封して西平王とした。間もなく武信節度使王宗佶・前東川節度使王宗濂らを扈駕指揮使として、山南の諸州を襲わしめ、興元を攻めその節度使李繼業を執え、武定節度使拓拔思恭がその地を以て王建に降伏したのでここに至つて王建は山南西道を併有することになった。3年（903）8月唐では西川節度使西平王王建に守司徒を加え、爵を蜀王に進めた。郡王より国王に進めたのである。間もなく荆南の成汭が死んで山南東道節度使趙匡凝が弟の匡明を遣わして之を襲わせ、この地に拠らせ荆南留後にしたが、王建はその間に乘じて開道都指揮使の王宗本に命じて夔・忠・万・施の4州を定めしめた。また瞿唐が蜀の險要であるとの意見に従い、帰峽を放棄して軍を夔州に駐屯させたが、ここに至つて三峽の地を併有した。4年（904）4月唐は洛陽に遷都して天祐と改元した。王建は鳳翔の李茂貞と連和して朱全忠を討つた。2年（905）8月王建は前の山南西道節度使王宗賀らを遣わし、兵を率いて朱全忠側についていた昭信節度使馮行襲を撃たせ金州を取り、その降將王宗朗を金州觀察使とした。12月馮行襲がまた金州を奪還したので、王宗朗は城邑を焚いて成都に奔つた。資治通鑑卷二六五昭宣帝紀に「天祐3年冬10月丙戌。王建始めて行台を蜀に立つ。建東向し、舞蹈号働し、称すらく、『大駕東遷してより、制命通せず、権りに行台を立て、李晟鄭畋の故事を用い、承制封拜を請う。』と。仍りて勝帖を以て部する所の藩鎮州県に告諭せしむ。」と見えてい

るのによつても明らかなように、天祐3年10月王建は昭宗が洛陽に遷都してより以来、制命が通じないため、仮りに蜀に行台を立てんことを請い許された。翌4年（907）3月唐の昭宣帝は位を朱全忠に禅り、4月全忠皇帝を称し、開平と改元し、王建に遣使して諭させたが、王建の拒絶に遇つた。9月に至り王建はその將佐を会合して、皇帝と称することの可否を議したが、その際の意

見は大部分賛成に傾いたのに対して、馮涓のみは依然として蜀王称制を請うたが、結局安撫副使掌書記韋莊の謀を採用して遂に皇帝の位に即き、国号を大蜀と称した。これが前蜀の高祖である。開国当初には中書令王宗佶・散騎常侍韋莊・内枢密使唐道襲・宣徽南北院使潘峭・御史中丞鄭騫・翰林学士張格・王鑑の如き名士が朝政に与つた。また唐室の旧臣であつた王進ら32人がその旧官職に応じて前蜀の官爵を与えられ、¹⁰⁾宋玘ら100余人が皆帝より信任された。¹¹⁾これら前蜀に仕えた人人は、蜀の成都が險要の地にあるのと富裕であることに着眼して、唐末中原の兵乱を避けて成都の地に避難して来た唐の名臣世族或は唐の僖宗の時から王建に従つて各地を経て四川に入つた人々よりなるのであるが、これらの唐の名臣世族が多数蜀に入つて前蜀に仕えたのは王建自身の唐文化に対する理解ある態度に負う所も多大であつた。王建それ自身は目に書を知らない全く教養のない武人であつたが、僖宗のときより武人として唐朝に仕え、教養はないまでも、自然とその文化に憧れるあまり、好んで書生と討論してその理に略々通曉し、成都にある唐の名臣世族を礼遇して故事を修挙したために、前蜀の制度文物には唐の遺風が存したのである。¹²⁾蜀の成都に前蜀の時代唐の文化が余光を保つたが、これには勿論王建がその保護者保存者であつたことも与つて力があるのであるけれども、更に前蜀の外戚が富盛であつたことも、また蜀の文化を発達せしめる一因となつたと思われる。¹³⁾王建は即位の年の10月詔を下して堂宇庁舎を改めて宮殿となさしめたが、大庁を会同殿、毬場庁を神武殿、蜀王殿を承乾殿、清風楼を寿光閣、西亭子庁を咸宜殿、九頂堂を九乾殿、会仙楼を竜飛楼として諸殿閣が壮麗を誇り、⁴⁾また後に寿昌殿に竜興宮を起し、別に扶天閣を建造して、夫々帝の肖像あるいは功臣の肖像を以て飾らしめた。五代史記注卷六三上前蜀世家の注に引用している宋の陶岳の五代史補に「王建の号を僭するや、ただ翰林学士最も恩顧を承く。侍臣或はその礼の過ぐるを諫むるに、建曰く『けだし汝が輩これを見ざるなり。むかしわれ神策軍にありしとき、内外の魚鱗を主り、唐朝諸帝の翰林学士を待つを見るに、交友と雖もしかざるなり。今わが恩顧当時の才に比し百分の一あるのみ。何ぞ之を過当といわんや。』と。論者之を多とす。」と見えているのによつても判明するように、翰林学士を優遇した。また王建はその開国以前に成都に来た西域の胡僧を尊敬したが、このことは五代史記注卷六三上前蜀世家の注に引用している「群居解頤」によると「偽蜀王先主未だ国を開かざる前、西域胡僧蜀に到る。蜀人胆て敬すること釈迦に見ゆるがごとし。大慈の三学院に舎す。蜀主復庁に謁坐し、都の士女を傾け、院に就いて止めゆかしめず。婦女列次俳優を王舎城に拝す。揚言して曰く『女弟子勤礼拝願す。後身面孔一に和尚に似たり。』と。蜀主大に笑う。」とある。通正元年(916)8月王建は文思殿を起し、清資五品の正員官に命じて群書を購求し、文思殿に所蔵する図書の充実を図らしめ、内枢密使毛文錫を文思殿大学士に任じたが、これは唐の玄宗の時に集賢殿に集賢殿学士を置いて御書を掌らせた例に倣つたものであろう。

上に述べた数例によつても前蜀の高祖王建が唐の文化人を挙用して、唐の文化を成都の地方に温存せんとしたことが明らかになるであらう。

高祖は位にあること12年の後、光天元年6月72歳を以て死に、末子の衍が18歳で位を嗣いだしたが、これが後主である。後主王衍は頗る教養があつたが、このことは五代史記注卷六三下前蜀世家に引用されている蜀禱祝に「頗る経史詩賦を好む。」とあり、また冊府元龜卷二二八僭偽部好文に「蜀の王衍、童年より即ち能く文を属し、甚だ才思あり。尤もよく豔歌をつくり、或は著す所あり、蜀人皆これを伝誦す。」とあるのなどによつてこれを知ることができよう。特にかれは詞余にすぐれ「醉妝詞」という名作を残したことは有名である。これは花間集に歐陽炯のつけた序によつて明らかである。詞余は唐の李白の「憶秦娥」「菩薩蛮」「桂殿秋」白居易の「憶江南」等

に濫觴したものであるが、五代に入つて益々盛んになり、前蜀・後蜀・南唐において名人を輩出した。前蜀では韋莊・薛昭緯・牛嶠・牛希濟・毛文錫・顧夔・鹿虔扆・尹鶻・毛熙震・李珣は皆この方面で著名である。これは唐代に始まり、宋元に盛んになる俗文学の中継者という点で注目すべきものである。五代史記卷六三の前蜀世家によると、王衍の生活はさながら玄宗の驕麗山華清宮における燕楽の縮図ともいふべき観を呈している。即ち「衍好んで大帽を戴き、微服して民間に出遊する毎に、民間大帽を以て之を識る。よりに國中に令し皆大帽を戴かしむ。また好んで尖巾を裹ましむ。その状錐の如し。而して後宮皆金蓮の花冠を戴き、道士の服を衣、酒酣にして冠を免ず。その髻鬢も然り。更に朱粉を施す。醇妝と号す。國中の人皆之に效う。嘗て太后・太妃と青城山に遊ぶや、宮人の衣服は皆雲霞を画き飄然として之を望むに仙の若し。衍自ら甘州曲を作りその仙状を述ぶ。」とある。その醇妝の流行は盛唐時代における楊貴妃の涙妝の流行にそつくりそのまゝであり、甘州曲は霓裳羽衣曲をしのばせている。五代史記注卷六三下に引用している五国故事に「衍、偽位につき、酒色に荒淫、出入度なし。常に繪綵数万段を以て結んで綵楼をつくる。山上に宮殿亭閣を立つること一に居常の棟宇の制の如し。衍その中に宴樂し、或は句を踰ゆるも下らず。又別に二綵亭を山前に立て、金銀鑄釜の属を以て御厨の食料を取り、その間に烹煑す。衍、綵楼に憑り以て之を視る。之を当画厨綵という。山の前また一渠を穿ち以てその宮中に通ず。衍、醉に乗じ、夜綵山を下り、即ち小竜舟を渠中に浮かべ、宮人をして短画船に乗じ、倒に炬觶千余条を執り、水面に逆照し以てその船を迎えしむ。歌樂の声渠上に沸く。宮中に抵るに及びまた宴を酣にし、曉に至り、綵楼上風雨霜雪に遇う。乃ち重ねて之を易え、愛惜する所なし、好んで大裁帽を戴く。けだし混ぜんと欲す、已にして人^ヲ以て泥首包蓋の兆となすのみ。」とあり、鑑戒録に「帝或は昼は鬼神となり、夜は狼虎となり、諸宮内に潜入し、嬪妃を驚動す。老小奔走し往々卒を致すあり。」とある記載などを見ると、当時の成都における前蜀人の生活が、いかに盛唐・中唐時代の唐人の生活の縮図を現出しているかを知ることができる。五代史記注卷六三下前蜀世家に青箱雜記を引用して「衍、上清宮を造り、元元皇帝および唐の諸帝の像を成塑す。」とあるのによつて、後主王衍が玄宗と同様に老子および道教を尊崇したことが明らかである。当時成都に居住していた画家に杜翬トイという者がおり、かれは安祿山の乱を避けて、この地に住みついた人の子孫で、肖像画に最も秀いでいたので、上清宮の壁上に唐の21帝の肖像を画いたことが益州名画録に見えている。唐代の仏寺道観に西晋南北朝以来の有名な画家の手になる壁画が数多く存在したことは、唐の張彦遠の歴代名画記卷三の「記兩京外州寺觀壁画」の条の記載などで明らかであるが、これが唐の武宗の会昌5年(845)の廃仏のため、殆んど悉く破壊され、それ以後中原では壁画の製作が見られなくなり、五代の前蜀において再び壁画が盛んに画かれ、殊に閻立本以来唐代に最も発達した肖像画の作られたことは、前蜀が唐代の絵画の余芳を伝えている点で注目すべき現象である。前蜀の画家としては、南北朝時代に盛んであつた道釈鬼神画をよくする高道興・房從真・杜子環・楊元真・張景思・支仲元・僧貫休などがいると同時に、唐代に発達した山水画に秀でた李昇・姜道隱、花卉翎毛画を専門に画く、滕昌祐らの出ていることは、やがて今後の画風の先驅をなすものである。また王衍時代の有名な女流詩人に黃崇嘏コウという者がおり、臨邛の黃氏の女で、平素男子に変装して兩川地方を遊歴し、詩を以て蜀の大臣の周庠を感心させたがこれは前蜀時代の閨秀作家として忘れてはならぬ人である。

VI 後蜀の文化

前蜀は咸康元年(925)11月に後唐に滅ぼされ、その後8年して、後唐の西川節度使孟知祥が閩

正月独立して、帝位に即き、明德(934)と建元したが、その7月に死んで、後主孟昶が位を嗣ぎ、
 広政28年(965)正月に滅びるまで、32年間後蜀が命脈を保つた。この国もまた成都を国都として、
 前蜀の文化を継承したが、これには孟知祥に教養があつたこと、¹⁵⁾および孟昶が文章を能くし、博
 覧で詩才があつたことなどが与つて力がある。¹⁶⁾五代史記注卷六四上後蜀世家の注に引用してある
 「王氏見聞録」に「偽蜀主の舅。累世富盛。興義門に宅を造る。宅内に二十余院あり。皆雕牆峻
 宇。高台深池。奇花異卉。叢柱小山。山川の珍物あらざるところなし。秦州の董城村院に紅牡丹
 一株あり。植うるところ年代深遠。人をしてこれを取り、秦州より成都に至る三千余里にして方
 にこれを致し、乃ち新第に植う。よりに少主の臨幸を請う。少主その基構華麗なること宮室に侔
 しきを嘆ず。(中略)明年蜀破れ、孟氏成都に入り、その第に抛る。」と見えているのでも明らか
 なように、前蜀時代に王氏の舅が興義門に豪壯な邸宅を造り、蜀の少主の臨幸を請い、少主にそ
 の豪華さを嘆ぜしめたが、この豪華さは後蜀時代になつても引継がれたらしく、同じく後蜀世家
 注に引用している「蜀壽州には後主孟昶の行樂を述べて「[広政]12年8月昶、浣花に遊ぶ。この時
 蜀中の百姓富庶にして、江を夾み皆亭榭游賞の処を荆む。都人の士女。傾城游玩。珠翠綺羅。名
 花異香。馥郁として森列す。昶、竜舟に御し、水を嬉み上下十里。これを望むこと神仙の境の如
 し。」とある。この外同年10月に百官を芳林園に宴して紅梅の花見の会を催したり、後また芙蓉
 観賞会を開いたりしているが、これらは盛唐時代の曲江の行樂を彷彿せしめるものである。なお
 「蜀壽州」の記載の中に「この時蜀中久しく安し。賦役俱に省かれ、斗ごとに米三銭なり。城中
 の人の子弟稻麦の苗を識らず。筍・芋ともに林木の上に生ずるを以てす。けだし未だ嘗て出でて
 郊外に至らざるならん。村落閭巷の間。絃管花誦。合筵社会昼夜相接す。府庫の積一絲一粒の中
 原に入るなく、財幣充実する所以なり。城上尽く芙蓉を植う。九月の間盛んに開く。これを望む
 こと皆錦繡の如し。昶左右に謂つて曰く『古より蜀を以て錦城となす。今日これを觀れば真の錦
 城なり。』」とあるのを見ると、成都に独立した後蜀がその国内の産物のうち一絲一粒も中原に入
 れる必要がなく、そのために後蜀の国庫は充実し、太平を享樂し、盛唐の氣風を現出し、後主を
 してこの時代の成都こそ、真の錦城なりと誇らしめたのも当然と思われる。五代史によると、孟
 昶は唐の昭宣帝の天祐16年即ち後梁の末帝の貞明5年(919)己卯11月14日に太原で生れたといわ
 れているが、五代史記注卷六四下後蜀世家に引用している研北雜録によると、孟昶はその生日毎
 に雪兔図を黄筌に画いて進めさせたといわれている。この黄筌は成都の人で、益州名画録によ
 ると、花竹を滕昌祐に、鳥雀を刁光に、山水を李昇に、鶴を薛稷に、竜を孫遇にそれぞれ学び、孟
 知祥に仕えて、翰林待詔を授けられ、蜀の後主のために六鶴殿に鶴を画き、八卦殿に花竹鳥雀を
 画いた人で、五代の花鳥翎毛画家として、南唐の徐熙と並んで、双壁と称せられ、後蜀における
 花鳥画の大成者として中国絵画史上特筆される。

宋の郭若虚の「図画見聞志」卷一に記載している「論黄徐体異」の説によると、黄筌の翎毛骨
 氣豊満を尚び、徐熙の翎毛形骨輕秀を貴ぶとあり、当時の諺にも黄家は富貴、徐熙は野逸といわ
 れ、ここに至つて中原の花鳥画家が皆顔色を失い、後蜀だけが南唐と共に花鳥画の大宗を掌握し
 た有様である。趙徳元・趙忠義は皆唐末の趙公祐の子孫、蒲師訓・蒲延昌・張久・阮知誦・阮惟
 徳以下高道興の子、高從遇・周行通・丘文播・丘文晔・丘慶余などは皆後蜀の絵画を中国画界に
 重からしめる諸名家で、殊に高氏は成都出身の家柄、前蜀に仕えた高道興、その子で後蜀に仕え
 た高從遇、從遇の子高文進、文進の二子高懐節・高懐宝という風に、四世にわたつて父子皆名手
 の譽れ高く、宋の図画院祇候になつた高懐宝は「宣私画譜」にも見えているように花竹・翎毛・
 草虫・蔬果に秀いでてその技が精妙の域に達し、殊に翎毛では、実に宋代における蜀地方出身の

第一人者とすべきもので、このような技の絶妙な高懐宝を宋代に出したことは前後両蜀時代における高氏歴代の精進努力の結果の現われで、高氏歴代の画家が前後両蜀時代に中国絵画の発達に貢献した功績は実に多としなければならない。

詞余作家としては魏承班・閻選・欧陽炯らがあり、閻秀作家には後主孟昶の愛姫であつた青城の費氏の女花蓋夫人も宮詩に巧みであつた。そのために中国最初の詞余を集めた「花間集」が趙崇祚により編纂せられ、欧陽炯の序を付けて広政3年(940)に公にされ、その外この種の編集物として「竹潤集」十巻、花蓋夫人詩一巻、韋穀の撰による唐詩千首を集めた「才調集」十巻のような新しい純浮豔文学の集もできた。朱昱の「猗覺寮雜記」によると成都の地方には、唐末から墨版の出版事業が行なわれ、更に宋の葉夢得の「石林燕語」に引用している柳玘訓の記載には、唐の僖宗の中和3年(883)頃に蜀の成都の書店で販売している字書はおおむね雕本とあり、良紙の生産があると共に、蜀地方が印刷文化においても抬頭したことは由来が古いので、花間集以下の諸書も恐らく刊行されたのにちがいないと思われる。また孟昶時代に漢一字石經・魏三字石經・晋石經・北魏石經・唐の開成石經の流風を襲つて宰相母昭裔が周易・尚書・詩經・周礼・儀礼・礼記・左伝・公羊伝・穀梁伝・論語・孝經・爾雅の十二經の石經を広政7年(944)に製したのは周知の通りで、宋の范成大の「石經始末記」にはその筆者として張徳釗・楊逢吉・周徳正・周朋吉・張紹文を引挙している。

Ⅶ 結

以上略述したところによつても、明らかなように、玄宗入蜀以後の成都是、中原の中国文化を十分に消化吸収して、漸く特異性を発揮しようとする傾向を生じ、五代の騒乱の時代に中原の文化が漸く衰え、宋文化に変質しようという時に、前後両蜀ではよく唐の文化を温存してその余光を放たしめ、また一面において宋元文化の先駆者たるの色彩を具えるに至らしめたのである。

註

- 1) 那波利貞教授 昭和12年度京大東洋史特講「五代の文化史的考察」
- 2) 内藤虎次郎「五代の絵画」66頁(支那絵画史所収)
- 3) 宇都宮清吉「漢代社会経済史研究」348~351頁 大庭脩「秦の蜀地経営」(竜谷史壇 33号)
- 4) 那波利貞「文化史上より観察する四川省成都(下)」19頁(歴史と地理12巻6号)
- 5) 華陽国志卷三蜀志
- 6) 「説文月刊」巴蜀文化専号(3巻4期)
- 7) 内藤虎次郎「五代の絵画」66頁
- 8) 「蜀故卷十六」元和中、成都樂妓薛濤者、守宏度、善篇章、足辭辯、營妓中之尤物也、元微之素聞其名、未嘗識面、初授監察御史、奉使西蜀、与薛濤相見、微之衿持筆硯、濤走筆作四友贊、……微之驚服、及微之入京、濤婦浣花、浣花之人、多造十色彩牋、於是濤別模新樣、小幅松花紙多用題詩、因寄獻元公百餘幅。
- 9) 王建と唐室との關係については旧五代史・五代史記・五代史記注などに詳述されている。
- 10) 五代史記註卷六三上前蜀世家引く所の蜀構机
- 11) 十国春秋卷三五前蜀高祖本紀上天復七年の条
- 12) 資治通鑑卷二六五昭宣帝紀
- 13) 五代史記註卷六四上後蜀世家に引用してある註に「王氏見聞録」の記事が見えるが、それによると「偽蜀主之舅累世富盛、干興義門造宅。」とあり、偽蜀主の舅即ち前蜀の外戚は五代史記註卷六三下前蜀世家に引用してある「蜀構机」によると徐耕であることが知られる。
- 14) 五代史記註卷六三上前蜀世家に引用してある蜀構机
- 15) 冊府元龜卷二二〇僭偽部才芸
- 16) 五代史記註卷六四下後蜀世家に引用してある野人間話
本論文の作成に当つて、那波利貞教授の「文化史上より観察する四川省成都」(上下)(歴史と地理12巻5.6)を参考させていただいたことを付記する。